

第5章 総 括

古代から中世にかけての遺構変遷を SZ63 中心にまとめ、総括としたい。なお「集石墓」は、石組区画墓の方形区画がやや崩れて退化したものという狭川氏の分類に基づいて使用する（狭川 2011）。

中世墓 SZ63 と関連遺構（第 16 ～ 20・40 図）

SZ63 は中世の火葬墓である。9 基の集石墓が想定され、3 段階の変遷をもちながら、一つの墓地を形成している。SZ63 の集石墓は規模の大小によって二分される。

大型の集石墓は集石 2 ～ 6 にみられるような、60 ～ 80 cm 四方の方形区画内に、石を高さ最大 20 cm ほど積み上げるものである。基底面の石や積み上げる石は必ずしも規則的に並べられてはいないが、部分的には明らかに人為的な配置があり、総体として方形プランに収まるものである。典型的な集石 6 をみると、70 cm 四方の方形区画内に高さ 20 cm ほどの山なりに石が集まっている。集石の中央には口縁部を欠いた珠洲の蔵骨器（59）があり、胴部下半までが集石に覆われていたと推定された。この蔵骨器の割れた破片が火葬骨とともに集石の基底部外側から出土しており、これは集石が土坑墓のように埋められたものではなく、当時の地表に露出した状態であったことを示している。中段階の集石 4 のように集石の中央に石が少ない場合、本来は集石 6 のように蔵骨器が据えられていたことが想定される。

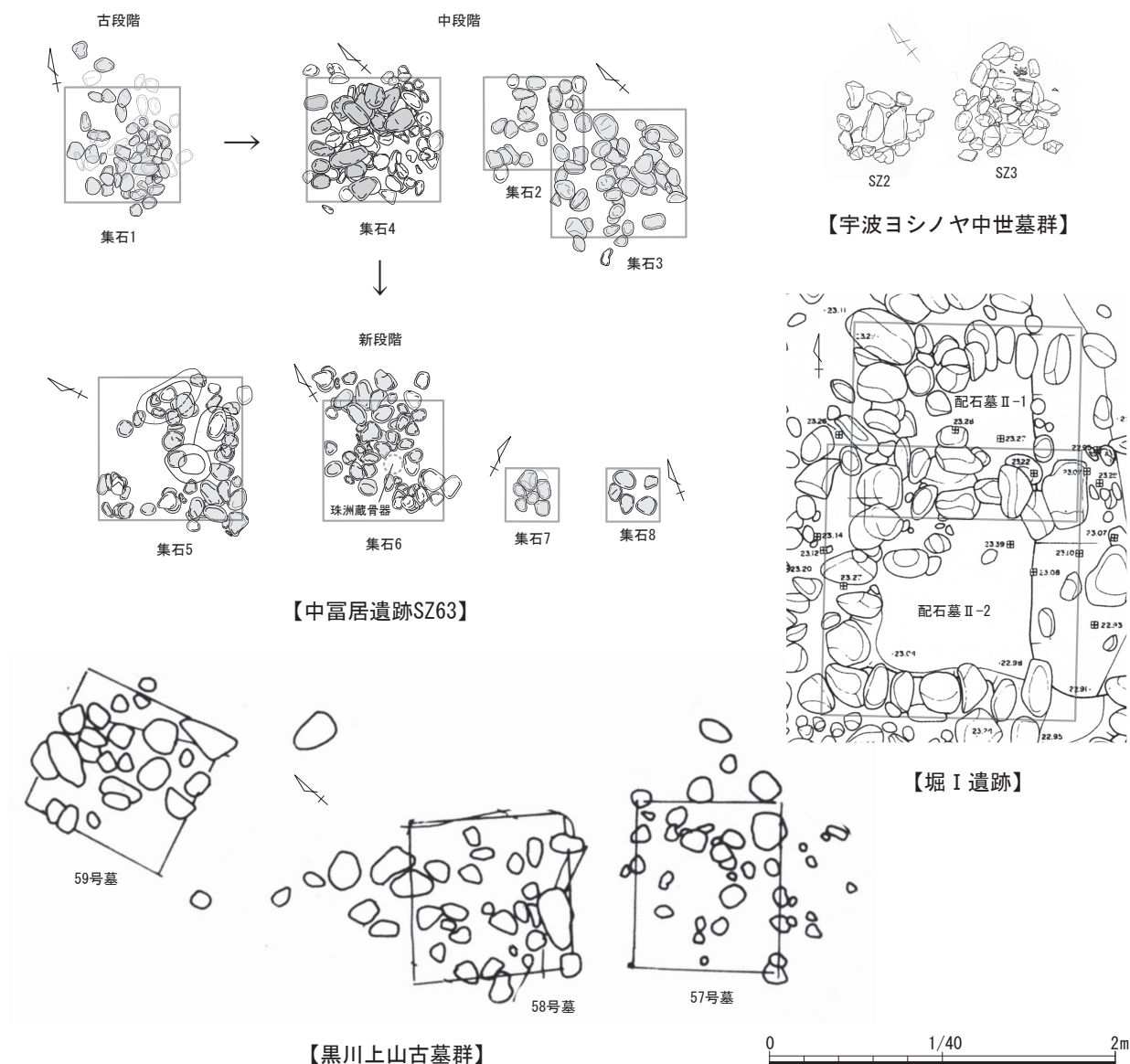
また、集石内部が小区画に分かれるものもある。集石 6 に後出する可能性のある集石 5 では、集石 5a と 5b に分けられ、その中央は石が少ない。集石 5a では集石下のピットの上面から火葬骨が検出され、さらに集石 5a では珠洲の播鉢（62）、集石 5b では龍泉窯青磁の碗（63）が出土した。これらの土器は集石の内部ではなく基底部から約 10 cm 上の集石上で出土しており、蔵骨器の蓋として使用されたものが転落したものと考えられる。集石 5a・5b のように蔵骨器がなく、蓋だけが出土する場合は、蔵骨器だけが抜き取られたか、曲物など有機質の容器が使われていたと考えられる。集石 1 ～ 3 のように蔵骨器や蓋の可能性のある土器を出土しないものは、集石内に火葬骨を直葬したか、袋などの有機質の容器が使用されたことが想定される。

集石墓で小型のものは、新段階の集石 7・8 がある。20 ～ 30 cm 四方の略方形区画内に平面的に石が並べられるものであるが、上部への石の積み上がりはほとんどみられない。火葬骨を直葬ないし有機質の容器に埋葬して、土を被せたのであろうか。集石 7 は集石 5 と、集石 8 は集石 6 と主軸方位が近く、大小の集石墓が対になっている可能性がある。集石 6 の火葬骨は人類学的報告では壮年ないし熟年の男性とされているが、小型の集石については、子どもを埋葬したものとも想定できる。しかし集石墓の最初期である古段階の集石 1 をみると、65 cm 四方の区画内に小型の集石が 4 基連接するように存在する（集石 1a ～ d）。子どもの墓 4 基から集石墓の造営が始まることは考えにくい、小型の集石の被葬者は大型のもののそれと何らかの違いがあったのであろう。あるいは墓ではなく、葬送儀礼に関連した供献行為が行われた場であった可能性もあり、SZ63 から少量出土した土師器皿は、儀礼に使用された器であるとも捉えられる。

SZ63 を囲む周溝状の溝 SD37b は、略方形で東西の内径は 4.0 m である。その中心から東側に SZ63 が、西側には円形土坑群があり、計画的に配置されたと考えられる。円形土坑群のうち、SK09 は底面中央で多量の煤が付着した割石が出土し、覆土下層には炭化物が含まれていた。壁面の被熱痕は確認できなかったが、SK09 は火葬土坑（火葬施設）の可能性があり、割石は棺台として使用されたと考えられる。土坑の規模からは、土坑内で膝を抱えるような座位で遺体を焼いたことが想定される。SK52 では覆土下層のリン・炭素分析を行い、地山試料より 1.58 倍多くリン酸を検出した。円形土坑

群からは人骨は出土しておらず、中世遺物も SK52 の珠洲片 1 点のみであることから、火葬後そのまま墓とした火葬収骨墓ではなく、火葬後に拾骨したものを SZ63 に埋葬したと考えられる。SD37b の区画内に火葬土坑と集石墓が共存する形となる。SD37b の東西には同規模の周溝状の溝が接続している (SD37a・c)。そこには SZ63 のような集石墓や土坑群は検出されていないものの、地下遺構を伴わない、地上施設のみで構成される墓が存在したことも想定される。SD37 は結界的性格をもった溝であろう。

SD37a・b や円形土坑群の下には、これらより古い長方形土坑群が帯状に分布する。西は調査区外へ延びる様子がある。東は SZ63・SE94 の手前で途切れるが、SZ63 より古いことから、SE94 を意識して途切れていると考えられる。SK44・45・93 をみると、覆土中層～下層は地山塊を多く含む粘性土で貼床状に埋め戻され、さらに SK44・45 では壁面にも同様の土が観察された。土坑底面付近は地山が砂質に変化し湧水があることから、水を遮断するためのものであろう。覆土上層には中層～下層と異質の黒褐色土がみられ (SK44・45 ①層、SK93 ②層)、SK44・45 では黒褐色土の断面形が箱形に



第 40 図 集石墓の比較

なることが確認された。この黒褐色土をリン・炭素分析した結果、地山試料の1.51～1.59倍多くリン酸を検出した。人骨や木棺は出土していないが、SZ63やSD37と帯状分布が重なることなどを積極的に解釈すれば、これらの長方形土坑は土葬墓の可能性はある。遺物は古代の土器片が少量出土しているが、SE94の手前で途切れることから、SE94に近い時期の土葬墓と考えられる。SK44・45はその並列する様子から、双墓として捉えられる。

以上の中世遺構は、井戸跡SE94・長方形土坑群(SK44・45・93等、土葬墓)→SD37・SZ63(火葬墓)・円形土坑群(SK09・52等、火葬土坑)への変遷があり、SZ63はさらに古・中・新段階に細分される。変遷の契機はSE94の廃棄にあり、この段階で長方形土坑群(土葬墓)の造営が終わり、火葬墓へ変化している。掘立柱建物跡SB03、柵跡SA02・130はこれらの遺構の北面に近接し方位も揃うことから、出土遺物による時期の特定はできないものの、いずれかの段階に伴う可能性がある。SZ63の集石墓が古段階から新段階へ主に南側へ展開していく様子から、墓の正面が北側にあると考えられ、SB03は墓に関連する簡素な覆屋であろうか。

中世の集石墓は、上市町黒川上山古墓群(上市町教委2005)や南砺市香城寺惣堂遺跡(福光町教委1993)といった丘陵部の信仰遺跡の例を除けば、県内平野部での事例はそれほど多くなく、富山市内では堀Ⅰ遺跡(婦中町教委1996)・安養寺遺跡(富山市教委1998)などがある(第40図)。黒川上山古墓群では12世紀後半～15世紀にかけて墳丘墓が多数造営され、その周囲に集石墓が散見される。2.0mを超えるものもあるが、57～59号墓などは本遺跡に近い規模である。蔵骨器は確認されていない。堀Ⅰ遺跡は13世紀中頃～14世紀にかけての配石墓とされるもので、区画石の内側に礫を積むものと土を盛るもの(配石墓Ⅱ-1・2)がある。蔵骨器は珠洲ないし八尾が想定される。氷見市宇波ヨシノヤ中世墓群(氷見市教委2014)は石動山信仰との関わりも想定される丘陵上の遺跡であるが、SZ2・3は50～60cm四方の石組内部に礫が充填され、SZ3の内部から火葬骨が出土した。14世紀後半頃とされるが蔵骨器は確認されていない。SZ3は蔵骨器をもたない、直葬か有機質容器を使用した事例である。これらの遺跡と比べれば、本遺跡SZ63は、集石墓の石組がやや崩れているものの、蔵骨器の原位置を推定できる事例があり(集石6)、大小の集石の存在が想定されるなど、集石墓の構造の一端を知ることができる。また土葬墓から火葬墓への変遷を追える可能性があり、県内の中世墓の動向を探る貴重な資料といえる。

中世墓 SZ63 の境界性

SZ63及びその関連遺構は、南北幅約3.0mの範囲を東西方向の帯状に分布している。この帯状の範囲は、現代の水田の畦道直下にあり、幅や方位が畦道と完全に一致している。この畦道は水田の畦畔としてはかなり幅のあるもので、少なくとも1961年の航空写真まで遡って確認できる。中世墓地が水田区画の境界線として現代まで遺存したことを示している。それは遺構検出面であるV層の、水田面下の青灰色に対し、畦道の下では赤みを帯びるという色調の違いとして明瞭に現れていた。

中世墓地の境界性に関する研究では、中世の葬地や墓地が荘園などの境界地点に数多くみられる事実が指摘されている(高橋2004)。境界地に墓地が営まれた事実だけでなく、その境界にどのような背景が存在するのかを検討する必要がある。

ここでは藤田富士夫氏による越中国新川郡の推定条里地割を引用し、SZ63が同地に選地した経緯を探りたい(第41図)。藤田氏は、越中国東大寺領荘園開田図が残る大藪荘を立山町浦田付近に比定し、神護景雲元年(767年)開田図にある「庄所」に5世紀初頭の巨大円墳である稚児塚古墳が存在するとした(藤田1998)。その後、新川郡衙を富山市米田大覚遺跡に想定するなかで、新川郡の条里の起点を米田大覚遺跡と蓮町遺跡周辺に求めた(藤田2004)。稚児塚古墳が神護景雲開田図の十一